

「やだ、もうやだあゝッ♡ごめんなしや、もうしないっ許してゑ♡」

「これはお仕置きなんだから、許すのもやめるのも決めるのは僕だよ。もうしないなんて、この状況で信じられると思う？」

「そうだよ先輩♡俺のこと誑かしたくせにもう終わりとか、あり得ないでしょ」

「反省しましたっほんとなの♡おねが、いはいゝゝッ♡♡」

「言葉だけならどうとでも言えるよ。もう僕以外じゃ満足できないくらいまでしないと、また浮気されたら悲しいしゝね？」

「えゝゝ先輩、ダメですよ♡俺の指に集中して？俺でイってくれないと嫌です♡」

暗い部屋のベッドの上、両手両足を固定された女が泣き叫びながら許しを乞うていた。粘着質な水音が響き渡り、女の悲鳴は時折横に座っている

男の唇によってくぐもった音に変わる。

涙を零す女の頬を舐め、この状況に似つかわしくない柔らかな笑みを浮かべた男は、女の嬌声に耳を傾け官能的なその身体を見つめるだけで、手を止める素振りは一切ない。

「ごめんなさいっごめんなさ、あ♡だめ、止めてっ♡いく♡またいつちゃうからぁぁ♡♡」

「うん、たくさんイっていいよ。謝りながらイってるのもすごく綺麗で可愛い♡：けど、この姿をコイツに見せたんだと思うと怒りと嫉妬でどうにかなりそうなんだ。悪いのは君なんだから、僕の怒りが治まるまで付き合ってくれるよね？」

女の頬を撫で、足の間に鎮座している男が顔を覗き込む。底なし沼のようになめられた瞳と目があった女は「ひゅっ」息を吞んだ。震える身体でどう

にか逃れようと試みても、拘束されている身体はビクともせず、「逃げようとした」と言う結果だけがその場に残った。

「…反省したんじゃないの？」

「し、したっ、しましたっ！でももう無理なの、休ませ、て？♡♡」

「あーあ、先輩ってほんとバカ♡そういうところも好きですけど♡」

一瞬止まった刺激が再開され、先ほどより何倍も強く激しい刺激が女を襲った。ガクンつと揺れる腰は足の拘束のせいで自由に動かすことができず、無理やりイカされた重い感覚に女は目を見開き声も出せないまま、何度目かも分からない絶頂を迎えた。

雲井理奈、都内の会社で働く会社員である。同じ会社に長く勤め、昇進によつて部下も増えてきた。かつこいい彼氏もいて仕事もプライベートも順調な理奈は、現状に満足しながらも少しの不安を抱えていた。

（最近燈くんに会えてない：気がする：）

昇進によつて増えたのは責任だけでなく、仕事量もちろん増え、理奈は今まで通りの定時退社とおさらばして残業することが増えていた。彼氏の朝日燈弥はとてつもなく優しい男で、残業で疲れている理奈に無理はさせられない、と最近は会うのを控えてくれていた。

連絡は取り合っている。ずっと会っていない訳ではなく休みの日にお互いの家を行き来することもある。けれど前より会う頻度が落ちていることは明らかだった。

（会いたくない訳じゃない。でも環境が変わったせいでストレスとか疲れ

が強くて家から出られない。疲れてるのに最近ムラムラするっていうか、不完全燃焼な感じも…)

燈弥はとてつもなく優しい男である。それはセックスにおいてもそうだった。最近は特に疲れている理奈を気遣ってかセックスはせずにダラダラ過ごしているだけという日も多かった。したとしても一回で終わった。り、理奈がイッたら燈弥自身は射精までいっていないにも関わらず終了したり。とにかく理奈に負担はかけたくない、と言って身を引いてしまう燈弥に理奈は少なからず不満を抱いていた。

しかし自身から「もっとして♡」とおねだりするの、それはそれで恥ずかしい。ふしだらな女だと思われたくない、という思いが理奈のストツパーになっていた。

「せーんぱい？なんか元気なさそうですね？」

「わっ!? ごめん、話しかけてた？」

「いえいえ、ため息ついてたのでどうしたのかと思って」

突如背後からかかった声に飛び上がった理奈はバツと後ろを振り返っ

た。そこに立っていたのは、理奈にとって初めてできた直属の後輩と言っていた雨宮玲だった。

愛嬌があつて世渡り上手な玲はすぐに部署内の人気者になり、年上に可愛がられていた。理奈も例外ではなく、よく懐いてくれている後輩に少なからず好感を抱いていた。

「何かありました？ 珍しいですね、声かけても反応ないの」

「う、ううん…！ 何でもないよ！」

流石に欲求不満という下世話な話を可愛がつている後輩にするわけにもいかずアワアワと両手を振りながら目線を彷徨わせる理奈に、玲は息をつ

いて屈み、理奈と目を合わせた。

「別に詮索とかしないでですけど、困ってることあるなら言ってくださいね！俺だって一応男ですし。先輩の力になれるなら何でもしますよ」

「うん、ありがとう…」

「はい。それじゃ、午後も頑張りましょうね！先輩！」

少し重くなった雰囲気気圧されながらそう言った理奈に目を細めて笑った玲はその場を後にした。その後ろ姿を見つめながら里奈は無意識に入れていた肩の力を抜いた。

（雨宮くん、視野が広くて愛嬌もあるいい子だけど時々怖い目するからちょっと怖いんだよね…前はそんなこと思わなかったのに、私の考えすぎなのかな…）

理奈の思う「怖い目」を感じるのはいつも一瞬で、瞬きの間にそれは姿

を消す。だからこそ理奈はいつも「気のせい？」と確信を得られずにいた。だが何度もそんなことを経験すれば、もしそれが気のせいであつたとしても苦手意識を持つてしまうのは当然のことだつた。後輩として好感を抱いている理奈も、最近は少し身構えるようになってしまつていた。

誰が見てもイケメンと口を揃えるほど顔が良く仕事を覚えるのも早くて効率的。愛嬌があり世渡り上手な社内の人気モテ男。それが玲である。そんな男が見せる見定めるような、心の中を覗くような瞳は理奈の心拍数を急激に上げる。どうにも収まらない動悸を落ち着かせるため、理奈は席を立った。給湯室でコーヒ―を淹れながら深呼吸をした。

「今日は燈くんと会う日だし、明日はお休み。早く仕事終わらせなきゃ」そう小さく呟いて理奈はコーヒ―を持ちながら席に戻つた。死角にいた人物に気がつかないまま。

「燈くん！」

「理奈、お疲れさま。今日も頑張ったね」

「えへへ」

頭を撫でられる感覚にくすぐったさを覚えながら理奈は破顔した。目の前には優しく柔らかい笑みを浮かべた燈弥が立っている。

一週間ぶりに会った燈弥は相変わらずで、繋いだ手から温もりを理奈に伝える。指が絡まり歩き出した二人は楽しげに会話を始めた。仕事の話、今日までのプライベートの話、行きたい場所。尽きない話題に相槌を打ちながら愛おしそうに見つめてくる燈弥に、理奈は恥ずかしそうに目を逸らした。

二人が付き合い始めてから一年が経とうとしていた。お互いの家に行くことも増え、一時は半同棲状態になっていたこともある。現在は理奈の仕

事が忙しくお泊まりができるのはお互い翌日が休みの時だけ。触れている部分から熱が伝わり、理奈は顔を赤くする。

「相変わらずだね理奈。もう一年経ってるのにまだ恥ずかしい？」

「だって、会えるの久しぶりだもん……」

「そっか、僕も会えて嬉しい。最近仕事どう？落ち着いてきた？」

「うん！繁忙期だし昇進して仕事量も増えたから大変だけど……もう少しで一段落つくかも。そしたらもつと会えるようになるよね……？」

「そうだね、最近あんまり会えてなかったしこれからのもつと会えるように僕も調整するよ。今日は家でゆつくりしようね」

スーパーやコンビニで買い物をしてから燈弥の家に向かう。理奈の家より広いため、お泊まりは基本燈弥の家と決まっていた。いつも通り燈弥が鍵を開けて理奈を招き入れる。

「お邪魔しますっ」

「はい、おかえり」

玄関に買い物袋を置いて理奈を抱きしめた燈弥はそのままぎゅつと力を込めて、理奈の感触や匂いを堪能するように息を吸った。理奈も燈弥の背中に腕を回して胸元に顔を埋める。爽やかな香水と燈弥自身の匂いが混ざった香りが鼻を掠め、理奈は身体の力を抜くように息を吐いた。

ゆっくり身体が離れて近くで目が合う。少し熱のこもった視線に理奈の心臓がドクンと音を立てた。ドキドキしている鼓動が燈弥に伝わってしまつてやいないかと、理奈は繋いでいる両手に力を込めた。

「はは、可愛い」

「っ、もう、揶揄わないで…んっ」

ちゅ、と軽く唇が合わさって理奈は反射的に目を瞑った。燈弥の大きな

手が頭を撫で、腰を支える。

少しだけ涙が滲んだ理奈が燈弥の胸元のシャツを握りしめて唇を開こうとした瞬間、燈弥の顔が離れていく。

「っえ、？」

「立ちっぱなし疲れたでしょ？家入って。お風呂入れてくるね」

そう言ってさっさと買い物袋を持ってキッチンへ向かった燈弥を、理奈はポカンとした顔で見つめた後、小さくも長いため息をついて靴を脱いだ。

（そういう雰囲気だと思ったのに…もう、期待してる私に変態みたいじゃん…っ）

赤くなった顔を冷ますように頭を振って、燈弥を追いかける。ご飯の準備を手伝うため髪を纏めて手を洗った。一瞬感じた艶めいた雰囲気は霧散

しており、燈弥はいつも通りの優しい微笑みを湛えていた。

「お手伝い何したらいい？」

「ゆつくりしてていいのに。簡単だし僕だけでも作れるよ？」

「燈くんだって疲れてるでしょ？任せっぱなしでゴロゴロしてるのやだも
ん」

「そう？じゃあお願いしようかな。これ皮むいて適当に切ってくれる？」

「うん！」

手渡された野菜を受け取って少し洗いピーラーで皮をむいていく。別で
道具や調味料を用意して肉を切っている燈弥は集中しているのか理奈の方
を見ることなく手を動かしている。

燈弥は料理好きな男だった。それなりに節約も上手で、外食に行ったり
道具に頼るよりは、まず「自分で作れそうか・自分でできそうか」を考え

るような、そんな男だった。その分外食を伴うようなデートは少なかったが、理奈は燈弥のそういう自分とは違う部分も含めて好きだった。理奈に對してそれを強要しない所も大きかったかもしれない。友達とご飯に行ったり美顔器を買ったり。そういう理奈に對して自身の氣質を押し付けることなく送り出し、「お肌モチモチになってる、すごい」と素直に笑う。

理奈は野菜を切りながら時々隣の燈弥を盗み見る。真剣に調味料を厳選している燈弥はその視線に気づくことはない。しかし聴覚まで遮断しているわけではないようで、野菜を切る音がなくなったのに気づいたのか遅れて理奈に視線を向けた。理奈が何も言わずに自身の眉間を指差すと、少し恥ずかしそうに笑って顔の力を抜いた。

「また寄ってた？ 恥ずかしいな…」

「燈くん集中するといつも皺寄るよね、跡ついちゃうよ？」

「僕も気をつけてはいるんだけどね…無意識だからなかなか直らなくて」

「んふ、跡ついちゃっても燈くんはかつこいいから大丈夫だよ」

「そう？理奈に嫌われないならいいけど。でもずっと好きでいてもらえるように気をつけるよ。ね？」

「そうやっていつつも揶揄うんだから！も…急にそういうこと言わないでよ…」

含み笑いをする燈弥に今度は理奈が恥ずかしそうに顔を赤くして頬をむくれさせた。

理奈はストレートに好意を伝えられるのに弱かった。燈弥と付き合ってから一年が経っているというのに、未だ慣れることがなく毎回新鮮に照れてしまう。それが分かっているのか、燈弥はなんてことない場面で急にそういうことを言うのだ。

「ごめんごめん。理奈があんまり可愛いからついやっちゃうんだよね」

「それがダメなのっ！野菜切れた、次何すればいい!？」

「ははっ怒らないで、怒ってる顔も可愛いだけだから」

「だからっ…も…っ…っ」

ぐ…と呻きながら燈弥の次の指示に沿って動き出す理奈の後ろ姿を、

燈弥は気づかれないようにじっと見つめていた。

「ごちそうさまでした」

「はい、ちよつと休憩したら先お風呂入っておいで。片付けは僕がやるから」

「え、でも、」

「いいから。ほら肩ガチガチだよ。お風呂浸かってしつかりほぐしてきて」

理奈の肩を少し揉みながらそう言った燈弥に押し負けた理奈は、燈弥の言葉に甘えてソファで少し休憩した後、浴室へ向かった。浴室には既にお泊まり用の理奈のパジャマが用意され、棚に収納されているボックスの中には綺麗に洗濯され畳まれた状態の下着が入っている。

できるだけ可愛い下着を選んで取り出した理奈は服を脱いで洗濯機の中に入れた。浴室内も綺麗に整頓されており掃除が行き届いている。理奈が

使うシャンプーとトリートメントというだけでそこに置かれているボトルもボディスクラブや洗顔、デパコスのクレンジングオイルも、全て燈弥が理奈の為だけに買って置いているものだ。この家には理奈の物が多い。これで半同棲ではないのだから、世の半同棲カップルは何をもって半同棲と自称しているのか、理奈は時々首を傾げたくなる衝動に駆られる。

頭を洗ってトリートメントを馴染ませている間に身体を洗う。入念にボディーソープを行き渡らせてムダ毛がないか鏡越しに背中やお尻を確認する。理奈は「こういう確認をしている瞬間の私が世界で一番滑稽な気がする」と少し凹んでいるが、それもこれも燈弥に少しでも綺麗だと思われたいがため。妥協は許されないのである。

その精神で全身のチェックを終えた理奈はトリートメントを流して髪を纏めてから湯船へ浸かった。少し熱めのお湯が理奈の全身を包んで熱を与

えていく。「ふうくく…」と息を吐いた理奈は肩まで湯船に浸かりながら今日のことを回想する。

（やつぱり私って色気みたいなのないのかなあ。だから帰ってきた時キスだけで終わって、えっちも私だけが気持ち良くなって終わって…あゝもうっ！こんなこと直接聞く勇氣ないし、というか聞けたとしてもし「理奈じゃもう興奮できないんだよね」とか言われたらそれこそ心折れるし…）

「理奈く？お湯の温度どう？熱くない？」

「わあああっ!？」

急にドア越しにかけられた声に理奈は声を上げて驚き危うく溺れてしまいそうなのを何とか耐えて「だ、大丈夫！気持ちいいよ！」と返事をした。考えていたことがことだけに、別に疾しいことはしていないにも関わらず声が裏返ってしまったことに理奈は赤面した。

「良かった、入浴剤も好きに使ってね。新しく買ったやつあるから感想聞かせて？」

「うんっ！一番前に置いてあったやつこれから使う予定！上がったら感想言うね！」

「ふふ、急かしてるわけじゃないからゆっくりしてきて。上がったらアイヌもあるよ」

「や、やった～：ありがとう～！」

理奈は少し震えたのを押し殺すように声を張って返事をした。燈弥が出ていったのを確認してから「はあああ～：～：～」と肺の中の空気を全抜きするくらいのため息をつく。口には出していないものの、そういうことを考えているときの本人登場ほど気まずいものはない。絶対に口には出していないと誓えるがもし考えを読まれていたら、とあり得ない想像をして

理奈はまたため息をついた。

「大丈夫。私は燈くんが大好きだし燈くんも好きって言ってくれてる。それで十分：だよね」

自身に言い聞かせるように呟いて、理奈は入浴剤の封を開けた。湯船に溶かしていくと柑橘系の香りがふわりと広がり、ぐるぐる回る考えをわざと無視しながら入浴剤の香りを吸い込んで湯船に沈んだ。

「上がりました」

「おかえり、ちゃんと温まれたね。水飲んでソファ座ってて。髪乾かしてあげる」

長風呂で上気した頬を撫でた燈弥は、キッチンから水を持ってソファに座っている理奈に手渡した。水を飲んで息をついた理奈の隣に座ってタオ

ルで髪の毛の余計な水分を取っていく。されるがままで水を飲みながら携帯をいじっている理奈に微笑んで「うるさくなるよ」と一度伝えてからドライヤーの電源を入れた。

前髪から順に熱を通し、長い髪が絡まらないように丁寧に乾かしていく。乾いていくうちに柔らかい感触と艶感が生まれ、燈弥は乾きにくい毛先へ風を移動させた。

「はい、終わり。トリートメント付けるよ？」

「うん！お願いします！」

手に取ったトリートメントを髪に馴染ませてから櫛でゆっくり毛先までとかせば、艶々でさらさらな髪の毛の完成である。少し熱の籠った髪を撫でてその手触りを味わっていると、理奈がパツと振り向いた。

「撫ですぎ！燈くんもお風呂入ってきて。入浴剤すごくいい香りだか

ら！」

「うん、分かった。理奈もアイス食べてていいからね」

「一緒に食べたいから待ってる！」

「じゃあ急いでお風呂行かないとだ」

理奈の頭をもう一撫でしてから、燈弥は浴室へ向かっていった。一人になった部屋で理奈は両膝を抱えて自身の髪をいじいと触りながら意味もなく携帯をスワイプする。

（甘えすぎかな、私：燈くんがいないと生きていけなくなったらどうしよう。お泊まり来るといつもこうだし断っても結局丸め込まれてるから燈くんのせいでもあるんだけど…！）

お泊まりの時に限らず燈弥は理奈の世話を焼きだがる。髪を乾かすのはいつものことで、なにかにつけて物を買って与えたり先ほどのように入浴剤

やアイスもいつの間にか補充されている。断る暇もなくお会計されていることが多いため、理奈はいつもそれを事前に止めることに精力を注いでいる。今のところ成功率は30%くらいである。ドライヤーに関しては既に諦めている。

シャワーの音が微かに聞こえる。ボディクリームを塗りながら理奈は逸る気持ちを抑えて深呼吸を繰り返した。久々のお泊まりで明日はお互い休み。期待しないわけがない。いつものように一回で終わってしまう可能性があるがあるのは少し怖いものの、理奈は好きな人と触れ合える時間が近づいているのを感じ、喉を鳴らした。

「それじゃ、ベッド行こうか。もう夜遅いし」

「う、うん…っ」

アイスも食べ終えて映画を観ながらゆったりとした時間を過ごしたあと、燈弥がベッドに行こうと声を上げた。それに反応した理奈は少しだけ赤面しながら、それに勘付かれないように俯いて燈弥に付いていった。

寝室の電気を付けて理奈を先に入れ、ベッドに座ったのを見届けてから照明を暗くし、燈弥もベッドに入り込んで理奈を抱きしめた。トクトクと一定の間隔で聞こえる心音に、理奈は燈弥の背中に手を回しながら燈弥を見上げた。

「ん？どうしたの」

「あ、えつと…もう寝る…？」

「…なあに、眠たくないの？」

低く掠れて甘くなつた燈弥の声に理奈の鼓動がドクンと跳ねた。雰囲気
が変わつたのを感じて、理奈は燈弥の部屋着をぎゅっと握りしめる。潤ん
だ瞳がじつと燈弥を見つめ、なんとも言えない甘つたるい空気が充満し始
めた。燈弥が理奈の頬を撫でてその瞳を見つめ返す。

「疲れてるでしょ？無理にスる必要ないよ？」

「疲れてる、けど…燈くんが疲れてないなら、シたい…です…っ」

思い切つてそう言つた理奈の声に燈弥の指の動きが止まる。横向きだつ
た理奈の身体を転がして仰向けにさせ、燈弥は上に跨つた。顔にかかった
髪を払いのけて唇に指を這わせる。

「しんどかったら途中ででもいいからすぐ言つてね？」

「う、んっ…」

ゆつくりと唇が合わさつて軽いリップ音が静かな部屋にこだました。手

が重なって指が絡まり、優しいキスに溺れながら理奈は片手で必死に燈弥の服を掴んで時折訪れる息継ぎの合間に呼吸する。

「口開けられる？」

「ん、あ：っ」

「うん、上手だよ。そのまま舌の力抜いててね」

「んっ：ふ、う：あむ：」

差し込まれた燈弥の舌が柔らかく理奈の舌に絡んだ。くちゆくちゆと激しくなる水音に理奈は耳を塞ぎたくなる衝動に駆られながらもそれについていく。燈弥の舌先が上顎を掠める度に肩がビクツと上がり背中が浮く。

（キス気持ちいい♡ぐちゆくちゆって頭の中響いてふわふわする：う♡）

浮いた背中に燈弥の腕が回って理奈を抱きしめる。グツと引き寄せられて深くなるキスに理奈は燈弥の首に腕を回しながら舌を絡めた。燈弥は理

奈の身体のラインを指でなぞって、裾から手を差し込んだ。男らしい節だった堅い指先が理奈の柔らかい腹を撫でる。その間もキスの雨は止むことなく降り続け、燈弥は器用に片手でボタンを外していく。

全てのボタンが外れ前を寛げる。寝るときはブラを付けていない理奈の身体はシャツ一枚だけに覆われていて、期待で緩く勃っている乳首がシャツを押し上げていた。

「ふ、かわいい：ここ、もう期待してるの？」

「や、っあ!?!♡んうゝ：っ♡」

「シャツの上からカリカリされるの大好きだもんね。いっぱいしてあげる」

口を離して顔を上げた燈弥は理奈の甘勃ちしている乳首に気づいて口角を上げた。シャツの上からぐるぐると乳輪だけをなぞってから、一気に力

リカリ♡と乳首の先端を刺激すると、理奈の身体がビクッと反応した。甘く甲高い声が漏れた理奈は恥ずかしそうに目を潤ませて唇を噛んだ。

「こら、噛まないよ。声いっぱい出して気持ちいいって僕に教えて？」

「んあっ♡はやい♡ふ、う♡あっ♡あんっ♡」

「いい子。両方カリカリされて気持ちいいね♡腰振って可愛い…」

燈弥の指が両方の乳首をカリカリカリッ♡と高速で引つ掻く。小さいのに拾う快感は絶大な性感帯を無遠慮に暴かれている感覚に理奈の腰がガクンッと跳ねた。

刺激されているうちに芯を持って完全に勃起した乳首は、理奈が背中を反らせたことでより一層シャツに押し付けられ、大きな快感を享受するようになっていた。シャツの上から見てもすぐに分かるほど大きく腫れている乳首をピンッ♡と燈弥の指が弾く。

「んひっ♡それだめっ弱い♡」

「うん、知ってる…♡シャツ捲っていい？直接触りたい」

「ん、あ♡きやう♡ぎゅってするのや♡う♡ん♡う♡」

「真っ赤になって震えてる♡根本キュって搾るみたいにされるの好きだよね？こうしながら先っぽカリカリ♡って…」

「んあ…っ♡同時だめえ♡ひ、う♡」

シャツが捲られ、ぷるんっ♡と胸が露わになり、服越しに刺激されていた乳首は赤く腫れて乳輪まで膨らんでいる。触れるか触れないかの場所に指を持っていくだけで期待してピクピク震えているのがすぐに分かった。

根本から先端に向かってキュッ♡キュッ♡と搾るように指が上下に動く、それに連動するように理奈の腰がカクカク揺れる。両方の乳首を同時に刺激され甘い声を上げる理奈を燈弥は心底愛おしそうな瞳で見つめてい

るが、快感に溺れている理奈はそれに気づく余裕を持ち合わせていなかった。ただただ燈弥の指先で小さな性感帯を弄られ続け喘ぐだけで、目は涙で滲んでいる。

「理奈、こっち向いて？可愛い顔見せて」

「やつ♡恥ずかしいからあ♡ひう♡」

「これからもっと恥ずかしいことするよ？いつも見てないせいでびっくりしてるのにいいの？」

「い、い…♡♡♡ひ♡♡♡♡♡灯♡♡♡♡♡やあ♡♡」

イエスの返事を聞くや否や、理奈の乳首にぬるりとした感触が這った。柔らかいつぶつぶしたものが乳首を掠め、左右に動く。かと思えばちゅう♡♡と吸われながら先端を穿られ、胸の中に沈み込ませるようにぐりぐり♡と押される。

突然訪れた先ほどとは全く違う刺激に、反射的に下を見た理奈の視界に映ったのは自身の胸に舌を這わせ、子供のようにちゅうちゅう♡と吸っている燈弥だった。もう片方は変わらず上下に扱っていて、視界に映るいやらしい光景に理奈の性感が一気に上昇した。

れるれるれる♡じゅるううう♡ちゅぷ♡ちゅぷ♡

「ひっあぁゝ：ッ♡んひい♡燈くんっ♡も、お♡」

「ん：ふふ、足擦り合わせてどうしたの♡もう下触ってほしい？」

「うん：っ♡触ってほし、い♡ひゃんっ♡」

「素直に言えていい子♡脱がせるから腰上げられる？あ、汚れちゃったね。終わったら新しい下着に替えようか」

腰を上げた理奈を支えながらすると下着を下ろしていくと、トロトロの愛液が下着とまんこの間を繋いだ。下着を完全に取り払って膣口に指

を当てるだけでぬちゃあ♡と粘着質な水音が鳴る。そこで細かく動かしていくとどんどん愛液が溢れ、燈弥の指を濡らしていく。

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

「ぐ♡ぐゝ…っ♡んあっ♡きやうう♡」

「聞こえる？くちゅくちゅってえっちな音してる…♡クリ触るから、足ちゃんと開いてるんだよ」

「ひ、♡ひっ♡きやううゝ…ッ♡あっ♡あっ♡んぐぐ♡」

「まだ触ってなかったのにぷりぷり♡敏感だから優しく擦るね？」

愛液を掬ってクリに纏わせ、優しくゆつくりと捏ねるように皮の上から擦る。気持ちいい触り方を熟知している指の動きに愛液がどぷう♡と一気に溢れ、シーツに流れ落ちた。

ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡

「んうう…ッ♡あっ♡あひっ♡」

（これやばい♡優しくちゅこちゅこされるのもどかしいのに気持ちよくて頭変になる♡燈くんの堅い指で擦られていくっ♡軽く触られてるだけなのに久しぶりだからすぐイっちゃ♡♡）

「腰ビクビクしてるね、いきそうかな？」

「う♡うんっ♡いく♡燈く、う♡」

「うん、いいよ♡一回イこうか」

理奈の額にキスを落とした燈弥は指を動かすスピードを保ったまま、乳首に舌を這わせながら理奈をイかせようと追い上げる。浮いた腰を支えながらいく寸前の理奈の表情を目に焼き付けようと見上げて目を細めた。

ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅこ♡れるれるるう…っ♡じゅぱ♡

「あ…ッ♡いく♡いくっ♡燈く、んっ♡いきゅう…っ♡♡」

「イけたね、いいこいいこ♡ナカももうこんなに柔らかくなってる…痛くない？」

「んぐ♡痛くない♡もつと上、してください♡」

「あ、もう頭ふわふわになってる♡上側の気持ちいいところ当てようとして腰動かしてるのえっちだね♡ここ？」

クリでの絶頂を迎えた理奈のまんこは愛液を零しながらくぱくぱと口を開け、ゆっくり差し込まれた二本の指をすんなりと包み込んだ。奥へ進む度にぶちゅっ♡と愛液が押し出される。

Gスポットに当てようとクイッククイッと上がる腰に従って燈弥は指を上側へ移動させ、ザラザラしてぷっくり膨らんでいるそれを探し当てた。少し触れるだけでぎゅう♡と締まったまんこが指に吸い付いて甘える。

じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡

「ぐ♡ぐ♡そこきもちい♡とうくん♡とうく、♡」

「うん、気持ちいいね。ナカちゃんと解れてきてるよ♡このままもう一回イける？」

燈弥はGスポットを潰すように指を細かく動かし、親指でクリをこりこり♡転がして理奈の身体を追いついていった。刺激で膨らんだクリの先端が皮を押し上げて、ピンク色の肉芽がぴよこつと顔を出す。そこを指の腹でしゅり♡しゅり♡と擦ると理奈の口から舌が力なく垂れ、唾液が頬を伝った。

（いった後すぐ挟み撃ちされるのキツイ♡気持ちいの終わんないっ♡今の私絶対下品な顔してるのに♡♡気持ちよくなってるの隠せない♡燈くんにはしたない所全部見られちゃってる♡♡）

「んい♡いく♡またすぐイツ♡…ツツ♡♡」

「お顔ぐしやぐしや♡可愛い…身体辛くない？」

「ぐ♡ぐんっ♡だいじよ、ぶだからっ♡」

「うん、もう十分解れたし挿れようね。ゴム付けるから待ってて」

理奈のまんこから指を抜いた燈弥はベッド横の棚からゴムを取り出してビニールを破り自身に装着した。ひくひく震えている膣口にぶちゅ♡と龟头を押し付けるとその感触だけでまんこが反応してちんぽを迎え入れようと収縮する。

「痛かったりしんどかったりしたら言うんだよ？我慢しないでね」

「うんっ♡わかった、あ♡」

「っちゃんと解したのにキツ…♡僕の大きいから負担かけてたらごめん、大丈夫？」

「ひぐ♡らいじよぶ、です♡奥きて…え♡」

「こっ：ら、あんまり煽るようなこと言わないの。ゆっくり動くから、力抜いて？」

ずぷううう：：♡とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡

「ふっ♡あゝ：っ♡んっ♡んっ♡」

「奥いっぱい突いてあげるから、好きな時にイっていいよ♡クリも弄ろうか♡」

「やあ♡待っ♡両方は気持ち良すぎちゃあ♡むりっむりい♡♡」

「無理？しんどいならもうやめようか：理奈に苦しい思いさせたくないし」

「ふえ♡おっちがぁ♡無理じゃないね♡もっとしてえ♡」

理奈が「無理」と口にした瞬間に燈弥の動きがぴたりと止まった。理奈の頬を撫でて涙の滲んだ目元を撫でる。少し意地悪な顔をしている燈弥に

気づかないまま、理奈は必死に続きを強請った。それにフツと笑みを浮かべた燈弥はずろおゝ♡とギリギリまでちんぽを引き抜いてから、一気に奥まで押し込むように腰をグラインドさせた。

：ばちゅんっ♡ずろおゝ♡：ばちゅんっ♡ずろおゝ♡：ばちゅんっ♡
「あゝ♡と、うく♡んんんゝッ♡奥つよい♡いきゅ♡大っきいのクゑっ

♡」

「いいよ、深いいき方しようね♡」

燈弥が理奈の足を抱えて肩にかけた。深くまでちんぽが入り込み子宮口を圧迫する感覚に理奈の喉が仰け反った。足がピンッと伸びて指先が丸まる。

（だめだめっ♡これイク♡深イキすりゅ♡子宮思いつきり押されて燈くん
の形理解らせられてるの興奮とまんない♡♡気持ちいのいっぱいイぐ♡

燈くんにかされる♡♡)

足を抱えたまま上半身を曲げて理奈の眼前まで顔を近づけた燈弥が、下の動きとは裏腹に優しく甘いキスをする。くちゅくちゅと舌が擦れ合いながら、ちんぽは理奈をかせるために激しく動き回る。

「んむづづ…♡いぐ♡あう♡いつくう♡♡♡」

「んっ♡ナカの締め付けすごいな…大丈夫？しんどくない？」

「つくひ♡ひっ♡んあ♡」

奥にぎゅう♡♡と亀頭を押し付けられながら深く絶頂した理奈は喉を高く鳴らしながら中々降りて来られない感覚に身体をビクつかせていた。

それを感じた燈弥はまだ射精していないバキバキに勃起したちんぽをずるっ♡と抜き取った。イきたてでひくひくしているまんこが入口を閉じようと懸命に動いているが、燈弥の太いちんぽを咥え込んでいたせいで中々

閉じることができず、愛液をダラダラと垂れ流している。

ベッド傍のティッシュを数枚手に取った燈弥は愛液で濡れているまんの周りを拭って自身に付けていたゴムも取り去りゴミ箱に捨てた。少し落ち着きを取り戻した理奈に布団をかけてベッドから降りる。

「新しい下着とタオル持ってくるから待っててね」

「っえ、待って燈くんまだ、」

「僕はいいの。理奈もう疲れてくたくたでしょ？気にしないでいいから寝てて。もし寝落ちちゃっても僕が着替えさせるから大丈夫だよ」

「でも、いつもこんな終わり方じゃ、私が燈くんのこと使ってるみたいでやだ…」

「…理奈がそんなこと気にしないでいいんだよ。僕は使われてるなんて思ったことはないし、理奈が気持ちよくなってくれただけで大満足だから」

ら。ね？」

いつもの流れに到頭俯いてしまった理奈の顔を上げさせ、燈弥は優しく口付けてから部屋を出ていった。シーンと静まり返った部屋に理奈の少し荒い呼吸音だけが響く。

（なんでいつもこうなっちゃうんだろう…私も燈くんのこと気持ちよくさせてあげたいのに、やっぱり私じゃ満足できないってことなのかな…もつと、伊つてもやめてくれないくらい激しいやつしてほしいのに…っ）

先ほど降りてこれないほどの深イキをしたにも関わらず疼き出したまんに指を伸ばす。軽く拭き取られたとはいえナカの愛液まで無くなったわけではなく、疼いた拍子に外へ溢れてきていた愛液はすぐに理奈の指を濡らした。

「ふ、あ…っ♡んんう♡」

下着やタオルを取りにいった燈弥はすぐには帰ってこない。それが何故なのか、追いかけたことがない理奈は知らないが、自身を慰めるにはもつてこいの時間だった。

うつ伏せになって腰だけを上げ、前から腕を伸ばしてクリの周りをくるくるなぞる。いった衝撃から落ち着いてきたクリは、理奈の指が近くを通り過ぎたことで「また触ってもらえる♡」と期待してピク、と震えた。愛液を纏わせてトロトロになった指でクリを挟んで上下に擦る。腰だけ上げているせいで溢れた愛液がクリ側に垂れてきて、芯を持ってこりこりのクリは更にぐちゃぐちゃになっていった。

ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「んっ♡あつきもち、い♡クリしこしこきもちい…♡♡」

どんどん早くなる指の動きに腰がカクカク揺れる。爪先で優しくカリッ

♡と引つ搔くとビリビリした鋭い快感が理奈の全身を駆け抜けて、理奈は枕に顔を押し付けながらそれを受け止めた。

(気持ちいい♡気持ちいい♡燈くんに弄られてたせいですぐイけちゃう…♡)

「ん、ふう…ツ♡イク♡イク♡イツ…♡♡」

二本の指でクリをぎゅちい♡と強く挟んでじゅこじゅこ♡扱くと、指の間でクリが腫れ上がりビツクン♡と痙攣する。そのまま同じ強さで扱いていき、理奈は絶頂を迎えた。ガクンッ♡と跳ねた腰がベッドに落ちてビクビク震えた。

「ふっ♡ふっ♡…んひい♡」

押し潰していたクリから指を離した瞬間も、その刺激だけで甘イキして全身を震わせた理奈はベッドにうつ伏せになりながら荒く息をして必死に快感を逃す。

（余韻すごい…♡敏感になったクリ押し潰すのクセになるう…♡）

「んひ♡っふ♡ふう…♡」

漸く落ち着いてきた呼吸に身体を転がして仰向けになり、ティッシュを取って汚れたところと指を拭いてゴミ箱に捨てた理奈は布団を被り直して何事もなかったかのような顔を作って燈弥を待った。

暫くすると遠くからパタ、パタ、とスリッパの音が聞こえてきて寝室のドアが開いた。タオルと下着を持った燈弥が理奈を起こして身体を拭いていく。

「寝てても良かったのに。まだ眠れなかった？」

「う、うん…」

さっきまでオナニーしてました、と言うわけにもいかず理奈は視線をウロウロさせながら、されるがままに身体を拭かれ下着とパジャマを履い

た。

再度ベッドに潜り込んできた燈弥に抱きしめられながら理奈は胸元に顔を埋めて目を閉じた。絶頂後の倦怠感が全身を包んで眠気を誘い、燈弥が頭や背中を撫でる手つきに身体を任せ、理奈は夢の中に落ちた。

「せーんぱい。お疲れさまです」

「雨宮くん、お疲れさま。進捗どう？」

「よゆーです♡てか先輩、今日の飲み会出るってほんとですか？」

「あ、うん。お世話になった人が異動するから、最後に挨拶したいし」

「えーそうなんだ！先輩いるの知らなかったから保留してたんですけど、

先輩が行くなら俺も行きます」

「そ、そう…？」

いつも通りの業務後、昼休憩も終わりに差し掛かった頃に玲が理奈のデスクへやってきた。今日の飲み会は異動する人を送り出す壮行会的な意味合いもあったため、普段はあまり参加しない理奈も今回ばかりはと参加すると決めていた。

理奈も行くなら、と言った玲はそそくさと幹事の元へ走っていき参加表

明をしていた。玲も普段は中々参加することがなく、しかし社員からの人気が厚く「雨宮を参加させろ」と言われるため、幹事は毎回勧誘にてこずっていた。成功率は20%くらいである。当日とはいえ玲の方から参加の意志が出たことで幹事は飛び跳ねるのかと思うほど大喜びしていた。

「先輩が酔っ払っても俺がちゃんと介抱してあげますね？」

「そんなに飲まないから平気だよ。雨宮くんも参加するなら楽しんでね」

「先輩がいるなら絶対楽しめます♪」

「もう、またそんな調子のいいこと言って…」

口が上手いのはいつものことである玲を軽くあしらって、理奈は午後の業務の準備をし始めた。「また飲み会で♡」と言い残して玲もデスクに戻っていく。

（二次会行くのはやめとこ…最近お酒飲んでなかったし、悪酔いしたら最

悪だもん。雨宮くんは二次会行くだろうし、ていうか他の人が離さないでしょ。参加人数も多いからずっと一緒にいるわけでもないよね…)

玲に対して少しばかりの苦手意識を持っている理奈は玲も参加することになった飲み会に若干気後れしながらも、今更取りやめも出来ないと心の中言い訳をした。

「それでは、上半期お疲れさま会と異動される3名の方々への壮行会ということで、乾杯！」

「「乾杯ー！」」

夜七時、大勢が参加するため貸し切った店内で、異動する3名と幹事の簡単な挨拶の後に飲み会が始まった。異動する人の周りには大勢が集まり、店内は賑やかで大変な盛り上がりを見せていた。その一端を担ってい

るのは言わずもがな、珍しく飲み会に参加した雨宮玲である。

「玲くん来るの珍しい〜！こっちきてお話ししようよお〜♡」

「あ、雨宮先輩！ドリンク次何飲みますか？」

先輩から後輩まで引っぱりだこの玲はあっちに行ったりこっちに行ったりで忙しそうに店内を彷徨っている。直属ではないもののこの会社に入ってから3年経っているため玲にも後輩は多数存在している。仕事ができて明るく顔の良い男はそこにいただけで視線を集めていた。

「先輩、今までお世話になりました。これからは別部署ですけど、また会いに行きますね！」

「え〜ありがとう！理奈ちゃんが初めての後輩だったから上手くできてたか不安だったけど、もうこんなに逞しくなって私嬉しいよ〜これからも頑張ってね！またご飯行こう♡」

「はいっ！」

お世話になった先輩への挨拶も済ませた理奈は元の位置に戻って料理をつまみながらお酒を嗜んだ。どの料理も味付けが濃いめでお酒が進む味をしていたためか、理奈はいつもより多めに酒を飲んでしまっていた。最初是一緒に飲んでいた同期も席を離れて異動する人や玲のところに行っていて、理奈の周りは現在既に潰れた課長&係長とその周りで未だに大学生ノリの飲み方をしている新卒で大騒ぎだった。賑やかな場所が嫌いではない理奈はそれを横目に酒を煽り、つい玲のいる方を見てしまう。

アルコールが回っているせいですこし目のあたりが熱く頭もふわふわしている理奈は、特に何も考えずに輪の中心で笑っている玲の顔をじいっと凝視する。

（やっぱり顔すごく綺麗だよね…燈くんとはタイプが違うっていうか、カ

ワイイ系？だけど可愛すぎるわけでもなく、かつこよさと半々みたいなの……皆が夢中になるのも分かるなあ」

そんなことを思いながら玲を見つめていると、不意に玲が理奈の方を見て目が合った。驚いてすぐに目を逸らしてしまった理奈の隣の席に誰かが座る音がして、理奈は反射的に隣を見た。

「目逸らすの酷くないですか？傷つきます」

「ご、ごめん……目合うと思わなくてびっくりして」

「俺は飲み会中先輩のこと何度も見てましたけどね。先輩全然こっち見えてくれないから悲しかったです……」

理奈の顔を覗き込んであからさまに眉を下げる玲に理奈は少し肩の力を抜いた。やはり今まで直属の後輩として可愛がってきたのだ。気のせいかもしれない怖い目をしなければ懷いてくれているのに悪い気はしないのが

先輩というものだ。

「雨宮くんは人気者だね。今も雨宮くんが私の隣に来たせいで後輩ちゃんたちの目が怖いよ…」

「俺が先輩と話したくて来たんだからそんなこと気にしないでください。それとも先輩は俺のこと嫌いですか？」

「そ、ういうわけじゃないけど…」

「ならいいじゃないですか！てか結構お酒飲んでません？顔赤いですよ」
ぼーっとしてて若干焦点の合っていない理奈を見て笑いながら垂れている髪をとって耳にかける。クリアになった視界で玲の手の動きを目だけで追いかける理奈の耳元に顔を寄せ、玲は小声で囁いた。

「ねえ先輩？もう異動する人への挨拶とか支払いとか終わってますよね？二人でどっか行きませんか？俺先輩と二人きりで話せる静かなところ行きたい

です…♡」

「んえ…？それはだめだよ、雨宮くんが居なくなったら皆悲しむし、男の人と二人きりは流石に…彼氏に悪いし…」

「別に俺居なくても皆さん楽しく飲めますってえ…彼氏さんの話聞かせてくださいよ。先輩みたいに綺麗で可愛くて頼れる人が選んだ彼氏さんがどんな人なのか知りたいです…♡あっグラス空きましたね、同じので良いですか？」

「あ、うん…？」

話している間も手持ち無沙汰で酒を飲んでいた理奈のグラスが空いたことに即座に気づいた玲は同じものを2つ注文した。比較的早く届いたグラスのうち1つを理奈に手渡して自身もそれに口をつける。

「先輩って意外とお酒好きですよ。時々水飲まないとお酔いしちゃいま

すよ？」

「別に、大丈夫だもん。吐くほど飲んだことないし、彼氏にもいっぱい飲まないって約束した、し：」

「：へえ。彼氏さんって結構束縛するタイプなんですか？」

「全然。むしろ束縛されなさすぎて不安っていうか：優しくていい人だけど、私はもっと束縛も嫉妬もしてほしい：私じゃ満足できなくて実は浮気してるのかなとか変なこと考える自分も嫌い：愛されてるって分かってるのに：い」

酔っている身体に最後の一撃とでもいうような酒をブチ込み、理奈は完全に酔っ払いと化した。聞かれてもいない不満が次から次に口から飛び出し、緩くなった涙腺から涙が溢れる。

「うんうん、寂しいですよね～自分のしてほしいこと全部言うのも欲しが

りみたいで嫌だし？」

「そう！そうなのお：っ私のこと大切にしてくれてるのは嬉しいけどそこまで気遣わなくても壊れないのに、言ったら言ったで丸め込まれちゃうし：私ってダメな彼女なのかなあ」

「えゝそんなことないですよ？あ、丸山さん！先輩酔いすぎて体調悪そうなので俺タクシー呼んで送ります。二次会行きたいのは山々なんですけど先輩放っていけないので：また誘ってください！」

偶々近くを通りかかった幹事の丸山に声をかけた玲は理奈へ確認せずにタクシーを一台呼んだ。ぐずぐずと机に突っ伏して泣いている理奈の顔を周りから見られないように上着を頭からかけて水を飲ませ、甲斐甲斐しく世話を焼いている玲に周りから声がかかる。

「玲くんもしかして、理奈ちゃんと付き合ってる…？」

「ええ〜!? 雨宮先輩そうなんですか!？」

「…うーん、まだ付き合っていないですよ。俺の片想いです♡」

玲からまさかの告白に店内は阿鼻叫喚に包まれた。「キャアアア〜!!」と叫ぶ人に「心の準備できてないままの失恋キツツ…」と泣いている人まで様々だったが、タクシー到着の通知を確認した玲は特に言及することもなく理奈を抱き上げ、鞆を持ちながら出口へ向かった。

「それじゃ、お疲れさまでした! また来週よろしくお願いします!」

元気に挨拶することは忘れず、暖簾をくぐった玲は既にドアの開いているタクシーに理奈を乗せ助手席に鞆を置く。反対側から乗車した玲は、一度理奈の肩を揺すって反応を見てみたが、泣き疲れたのか夢への入り口を彷徨っている理奈は特に反応を示さなかった。

「住所言うのでそこまでお願いします」

「かしこまりました」

うつらうつらしている理奈の頭を引き寄せて肩に凭れさせた玲は、規則正しく聞こえる静かな呼吸に耳を傾けながら、片手で口元を隠しながら窓の外を流れる景色を見つめていた。